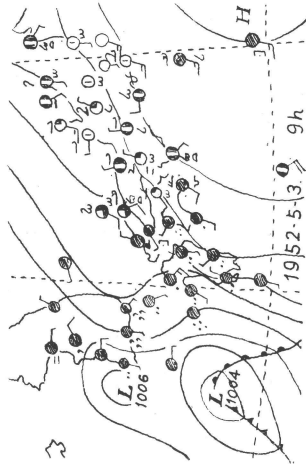


### 山雲の機構(4)

大井正一

ニール雲に類するものである。よく観察すると、(1)右の部分では雲の上面がくっきりしているのみならず、(2)雲の下は薄白く見えることがヴェール状の構造を示している。(3)左手の風下では相当乱れているが(4)左端では下から熱気泡のような上昇気流が雲のヴェールを突き上げていくのがわかる。(5)中央部で垂れ下がっているように見える部分は気温が低いために冷却して氷晶若くは水滴となったものが降下しているのであると考えられる。

ここに当時の気象状況として9時の天気図を示したが、この時は九州西方に二つ玉低気圧があり、雨は清水、広島迄来ており、中部地方各地では巻雲と高積雲が出ていて、従って天候悪化の前で、大気が湿って不安定になり始めているため



口絵の写真は松本市観光課の小林春実氏が1952年5月3日10時頃乗鞍岳で撮影されたものである。当時は西の風5~6m/s、気温4~6°Cであったという。図の右から流れる湿った気流が山のために強制上昇させられて、雲となったことは明らかであり、種類からいふならば文献〔1〕のヴ

あることは明らかである。しかし雨は21時には名古屋、舞鶴迄しか来ず、翌日の9時になって漸く御前峠、輪島の線の線に進み、21時に銚子、秋田迄進んで全国的に雨となっている。

輪島の高層資料を見るに600mb以下の層において気温も湿度も増加し、風向は西より次第に西南西に移りつつあるのは当然だが、不連続面というほど著しいものは認められない。従ってこういうた雲を必ずしも明瞭な不連続面と結びつけることは出来ない。輪島の12時700mbの気温は0°C、湿度は41%であった。

(1957.3.6)

引用文献

〔1〕山雲の機構(3)ヴェール雲：天気 4 3 (1957)